

形容詞の語幹につく接尾語「さ」 についての一考察

李 美 麗

1. はじめに

第二言語の学習にとって、語彙の習得が大切であることは周知の通りである。単語を一々覚えるのはかなり時間がかかる上に、忘れやすい。外国人の学習者にとって、語彙の学習はやはりあるまとまった体系があった方が覚えやすいと思う。本稿の動機はここに着眼したのである。

日本語の中で、接尾語をつけて新しい単語を作ることがしばしばある。例えば「痛む」のように形容詞の語幹に接尾語「む」がついて動詞になり、「寒さ」のように形容詞の語幹に接尾語「さ」がついて名詞になる場合がある。「痛む」は辞書の中に見出し語として載せてあるので、学習者にとっては問題にはならない。それに対して、「寒さ」は、ごく限られた語を除いて一々辞書に示されないで、形容詞の欄の後ろに「-さ」と表示されているのが普通である。そこで、学習者にとって、その意味を調べようとしてもなかなか見つからない。更に、次の表のように^①

(表 1)

	新しい	嬉しい	敢え無い
さ	+	+	-

① 新明解辞典による。

※辞書に「さ・み・げ」が記載されている語は「+」で、記載されていない場合は「-」で示す

接尾語「さ」が付くのはすべての形容詞に適用するのではなく、何らかの規則があるように思われる。

したがって、辞書から「イ」で終わる形容詞を抜き出して、それらを整理し、「さ」の接続につき、その法則を導き出そうとするのが本稿の目的であり、同時にその規則をどのように日本語教育に応用するかを検討することが本稿の主題でもある。

2.1 「さ」の実態

調査の対象は国語辞典の中における形容詞である。依拠した字典は『新明解国語辞典第四版』（以下【新】と略称する）、『集英社国語辞典』（以下【集】と略称する）、『新選国語辞典』（以下【選】と略称する）の三種である。

筆者が【新】【集】【選】について形容詞語幹プラス接尾語「さ」の登録状態を調査した結果を図示すると以下の通りである。

（表2）

	「さ」あり	「さ」なし	総数
新明解	493	113	606
集英社	510	96	606
新 選	461	145	606

調査の結果を見ると、少なくとも76%の形容詞に「さ」がつく。辞書により「～さ」の登載のしかたが異なるので、どれが絶対的に正しいとは言い切れない。また、辞書に記載していないのは必ずしもそういう用法がないわけではない。編纂者があまり使わないとか、収集した資料にそういう使い方がないなどの場合もありうる。

前の調査では、ほとんどの形容詞に「さ」がつくのに対して、どういう意味の形容詞に「さ」がつかないのか、検討する必要がある。ここでは3辞書に共通して登載されているか、されていないかを一つの目安として見る。以下は3辞書ともに「さ」を登載していない形容詞である。

相いれない 敢え無い あられもない いい いけない うずたかい
おおけない お寒い 思しい 面白おかしい 思わしい お安い か黒い
片腹痛い 愛しい かわゆい 極まりない くちい 口うるさい 口堅い
口幅ったい 木深い さくい さとい 四角い しがない しげい
子細らしい 舌たるい 忍びない 洒落くさい 酸い 詮無い 頼み少ない
でかい ど偉い とんでもない 似気無い 抜き難い 願わしい
のっぴきならない 計り知れない ばばっちい 日向臭い ひょろ長い
程遠い まったい まましい 耳遠い むさい めぼしい もっともらしい
やばい 止まない やむない やむをえない やわい 余儀ない 由ない
宜しい よんどころない

2.2 「さ」のつかない形容詞の分析

2.1で抄出した語は全部で62語である。これらの語の真相を突き止めるために試しに分類すれば、次のようになる。

I 口はばったい 子細らしい 洒落くさい 詮無い 分別らしい やむない
由ない

上の語はいずれも程度を表す意味ではないから、「さ」がつかないのであろう。

II かわゆい しんどい 酸い でかい ばばっちい やばい やわい

II類の各語は方言・俗語あるいは特定の人だけに使われる言葉が多い。それに、「しんどい」「やばい」を除いて「酸い」であれ「でかい」であれ、その意味から見れば、いずれも「さ」を伴うことができるはずである。しかし、それと同義である「酸っぱい」「大きい」という広く人々に使われている語がすでに存在し

ている。そこで、「かわゆい」「酸い」「でかい」などの語は意味の関係で「さ」がないのではなく、その基本的な語に比べて使用頻度が低いから、「さ」を取る必要性も少ないと思われる。

Ⅲ おおけない 愛しい しげい 全い

Ⅲ類はいずれも古語的である。言い換えれば、これらの語は現代においても存在するがあまり使われていないのである。

Ⅳ 敢え無い お寒い お安い 面白おかしい か黒い 片腹痛い しがない ど偉い ちゃんちゃらおかしい とんでもない めばしい 余儀ない よんどころない

Ⅳ類の語は「めばしい」を除いて、全部合成語である。その内、「お寒い」「お安い」「か黒い」「ど偉い」はその語構成が「接頭語＋形容詞」である。接頭語とは次に来る語に対して、ある意味を添えたり、語調を整えたりする働きを持つ。

次に辞書の解釈により、それぞれの接頭語ごとに見ていくことにする。

お：（形容詞・形容動詞について）それが相手に関する場合には尊敬、自分に関する場合に謙譲、一般的な状態に関する場合にはていねいの意を表す語。

か：主に形容詞について、意味を強めたり、語調を整えたりする語。

ど：下に続く語の意を強調する語。^②

上述から接頭語の「か」と「ど」はただ語意を強める意で、「お」は尊敬・謙譲・丁寧の意を表すことがわかる。意義面から考えると、その元の語である「寒い」「黒い」「偉い」はそれぞれ接尾語「さ」が下接できるのに対して、強調・尊敬の意を添える接頭語のついた「お寒い」「か黒い」「ど偉い」にも「さ」が下接できるはずなのに、なぜできないのか。他の場合はどうであろうか。同じく接頭語の「お」「か」「ど」のついた形容詞「おめでたい」「か弱い」「どぎ

② 接尾語「お」「か」「ど」の説明は集英社の解釈による

つい」はその元の形容詞「めでたい」「弱い」「きつい」と同様に「さ」が下接できる。なぜただ「お寒い」「お安い」「か黒い」「ど偉い」の4語だけに「さ」を加えることができないのか。「さ」と形容詞の結び付きを考えるのに、ただ意義面を考慮するだけではすこし不十分であると思う。更に別の角度から考えなくてはならない。次はその使用例からその構文的特徴を探ってみる。次の例^③を見る。

- (1) 経済大国とはいうものの、お寒い研究施設だ。
- (2) 彼を説得するなんてお安いことだ。
- (3)-a ランニングの脇からか黒い毛がはみ出していた。
- (3)-b その本は一部マジックでか黒く塗りつぶしてあった。
- (4) 今日はど偉い寒さだねえ。

上の用例を見ると、「お寒い」「お安い」「ど偉い」がいつも名詞にかかる連体形として、「か黒い」が連用形・連体形としてに文中に用いられている。したがって、この4語は意義ではなく、構文上の制限で「さ」を伴っていないのであろう。

そして、残った「面白おかしい」「敢え無い」「しがない」「よんどころない」などの語も構文上で独特の用法がある。次の例を見よう。

- (5) 世の中をおもしろおかしく暮らす。
- (6)-a 彼は敢え無い最期を遂げた。
- (6)-b 彼らの大胆な試みも敢え無く終わった。
- (7) 役者なんてしがない稼業ですよ。
- (8) 「あら、新年会に出られないの？」

「うん、よんどころない用事があってね」

「面白おかしい」は常に連用修飾の形で、「敢え無い」は連用・連体修飾で、「しがない」「よんどころない」は連体修飾の形で文中に現れている。

実はIV類の種々の語は意味の上では必ずしも「さ」を作らないわけではないが、

③ 以下、出典を示さない用例は全部『現代形容用法辞典』から抜き出したのである。

文中に使われる時に、いつも連体修飾あるいは連用修飾として働くので、「さ」を作る場面がほとんどないと言える。

V おぼしい 思わしい 極まりない くちい さとい 似気無い

Vの語は一見してお互いに何の関わりも無いように見えるが、その使用例から見れば、

(9) ときどき彼はきまじめな顔に似気無い滑稽なことを言う。

(10) 少女は母親とおぼしい女に手を引かれていた。

(11) おなかがくちくなった。

(12) 田中さんは利に聡い人である。

(13) 彼の態度は失礼極まりなかった。

(14) 検査の結果は思わしくなかった。

のように、これらの語は「～に似気無い（聡い）」「～と思しい+名詞」「～くちくになった」「名詞+極まりない」「～思わしくない」のような一定の語結合の一部としてしか使われていないのが共通点である。だから、V類の語もやはり意義面でなく、構文上の制限で「さ」が載せられていないのであろう。

VI 相いれない あられもない いけない 忍びない のっぴきならない

計り知れない 止まない やむを得ない

上の語はいずれも「～ない」で終わるのがその特徴である。まず、三つの辞書がそれに対する品詞の認定から見てみよう。

	【新】	【集】	【選】
相いれない	形容詞	連語	連語
あられもない	形容詞	連語	連語
いけない	形容詞	連語	形容詞
忍びない	形容詞	連語	形容詞
のっぴきならない	形容詞		連語
計り知れない	形容詞	連語	形容詞
止まない	形容詞	連語	連語
やむをえない	形容詞	連語	形容詞

三つの辞書ではこれらの語に対する品詞の認定は一致していない。【新】はこれらを形容詞とし、【集】は「のっぴきならない」を除いて、全部連語とし、【選】は語により、時には形容詞、時には連語として扱っている。なぜこれらの語は連語とされているのか。その理由は何か。次にまず連語の特徴を見よう。

複合語と似たものに、「連語」というものがある。連語とは、文法的には二つ以上の語が結合したものであるが、意味的には一つまとまりをもったものを、指している。^④

これらの語は連語の定義に合うかどうか。まず、意味上ではこれらの語が「一つまとまりをもったもの」であるのは言うまでもない。次に、その語構成が「文法的に二つ以上の語が結合したものである」か否か探求しなくてはいけない。「相いれない」「いけない」「忍びない」^⑤「計り知れない」「止まない」は全部「動詞の未然形＋ない」、「あられもない」は「ある＋れる＋も＋ない」、「やむをえない」は「やむ＋を＋える＋ない」、「のっぴきならない」は「のっぴき＋なる＋ない」である。これらの語の語構成は「文法的に二つ以上の語が結合したものである」にかなう。

この類の語はまたもう一つ注目すべきところがある。それはこれらの語は「あられもない」を除いて、全部「動詞の未然形＋ない」からなっていることである。この「ない」は助動詞の「ない」である。助動詞の「ない」が文中でどのように働いているか。

【助動】「ない」は、主として連体形についてであるが、やはりそれのついた文節全体が、連体修飾語として働き、その固定化がすすむと、一個の形容

④ 日本文法事典 p132 参照

⑤ 『日本国語大辞典』により、「忍びない」は「上二段動詞＜しのぶ＞（忍）の残存した未然形に助動詞＜ない＞のついたもの」である。

詞のように働くものがあらわれてくる。＜つまらない・くだらない・おもいがけない・耳慣れない・足りない・世擦れない……＞などである。これらはすでに、形容詞のように意識されているものもあるが、連用修飾に使われにくいものもあって、完全に形容詞化しているとは言えないのである。^⑥

「いけない」「たまらない」の類は形容詞と錯覚しやすいが、
いけません たまりません
とマスを下接させるところから、動詞系の連語とわかる。これらも「～ない」の形を取って居る限りでは、形容詞に準ずるものである。……しかし、形容詞に準ずるものとしても、終止法と連体修飾法しかないのに等しい。^⑦

上述から考えて、「～ない」を取る語は形態的に形容詞のように意識されやすいが、職能の上でそれなりの制限があるのが分かる。したがって、VI類の語の職能が上の叙述にふさわしいかどうか。次の用例を見よう。

- (15)-a 酒の飲み過ぎは体にいけないよ。
- (15)-b ご病気ですって？それはいけませんね。
- (15)-c 僕、いけない子だったね。
- (16)-a その子の哀れな様子は見るに忍びない。
- (16)-b もったいなく捨てるに忍びない服だ。
- (17)-a その湖の底深さは計り知れない
- (17)-b あの人には計り知れない恩を受けている。
- (18)-a 彼の立場はいよいよのっぴきならなくなった。
- (18)-b のっぴきならない用事でパーティーに欠席した。

このように、上の用例には「マスを下接させる」ことができるし、職能も「終

⑥ 高崎みどり「『ない』について」参照

⑦ 『研究資料日本文法』③用言編（二） p114, 115参照

止法と連体修飾法しかない」のである。したがって、VI類の語は形態が形容詞的だが、形容詞と違った文法的特質があるので、形容詞と見るのは妥当ではないと思う。

それに対して、すべて「動詞の未然形＋（助動詞）ない」からなる形容詞的な語にはすべて「さ」がつかないわけではない。

(19) だが、こういう一匹オオカミをかかえこんでいけないところに、管理野球のもろさ、つまらなさがあるのではないか。（天声人語 391）

(20) いいようのないやりきれなさが逆に慎一郎に、いつもより軽口を叩かせた。
（自我の構図 173）

(21) 慎一郎になぐりつけてもらいたいようなすまなさを感じていた。（自我の構図 223）

上の例のように、「つまらない」「やりきれない」「すまない」は「つまる」「やりきれる」「すむ」の打ち消しの形であるにもかかわらず、「さ」がついて使われることもある。これについてどう解釈したらよいだろうか。これらの言葉は語源的には動詞であるが日本人の意識の中ではもうそれを一つの形容詞として用いているのだろう^⑧。したがって「さ」との接続を認めるのである。

そのほかに、不思議に思われる例がある。

(22) でも、そういうわからなさが女には何となく魅力です。（松本清張集 99）

(23) どうも妙な男だと思ったが、これを「満州浪人」と解釈すると、彼の得体の知れなさが何となく解けてくるような気もする。（松本清張集 112）

(24) 時には、帰りとうないとさえ思うが、この心の定めなさは……

（細川ガラシャ夫人 273）

「わからない」、「しれない」、「定めない」の三語を形容詞とするのはおそ

⑧ 『品詞別日本文法講座4』巻末の資料、「古今形容詞一覧」に、「つまらない・やりきれない・すまない」の三語が登録されている。

らくないだろう。なぜ「さ」がつき得るかがどうしても納得がいかない。

このように助動詞「ない」を含む文節は形容詞のように働く場合もあり、完全に形容詞化していない場合もある。したがって、こうした助動詞の「ない」を取る語をどのように考えていくかはまた重要なテーマである。

VII そのほか

いい うずたかい 口うるさい 口堅い 木深い さくい 四角い

舌たるい 頼み少ない 抜き難い 願わしい 日向臭い ひょろ長い

程遠い まましい 耳遠い むさい もっともらしい よろしい

VIIの語について、「いい」は「よい」の口語表現で、その活用はただ終止形と連体形しか用いられない。だから、「いい」「よい」の「さ形」がいずれも「よさ」である。

「四角い」は漢語からなる形容詞で、その元の語「四角」は名詞であるから、「四角い」は名詞度の高い語であると言える。したがって、わざわざ「さ」がついて、名詞になる必要がないように思われる。

そのほかは問題語である。これらのうち、「うずたかい」「口うるさい」「口堅い」などのように、「名詞＋形容詞」という複合的構造の語が一番多い。

「名詞＋形容詞」の概念構成は、後述する、包摂関係のうちの、主体限定がほとんどである。換言すれば、格助詞「が」によって規定されるはずの关系到、相当する関係である。^⑨

先に挙げた諸語の形態から見てもわかるように、全部主体限定の関係である。つまり「口うるさい」は「口がうるさい」、「口堅い」は「口が堅い」のようになりうる。それは実体（口）と属性（うるさい・かたい）との関係である。もとの属性を表す「うるさい」「かたい」はいずれも「さ」を伴うことから見て、こ

⑨ 塚原鉄雄 神尾暢子「複合形容詞の構成と表現」参照。

これらの「名詞＋形容詞」からなる複合語の形容詞も「さ」を伴うはずである。なぜ伴っていないのか。

残る「日向くさい」「ひょろ長い」「むさい」「宜しい」などの語はその意味がいずれも「さ」の定義に合うようである。特に「宜しい」は「いい」「よい」の改まった言い方で、「よい」に「さ」があるのに、「よろしい」に「さ」がないのはどうしても理解できない。「日向臭い」もそうである。「くさい」は3辞書とも「さ」を記載していると同時に、同じく「～くさい」の「けちくさい・どろくさい・ちちくさい」などには、それぞれ「けちくささ・どろくささ・ちちくささ」を載せているにもかかわらず、「日向臭い」は3辞書とも「さ」を載せていない。しかし、筆者は次のような使用例を採集している。

(25) 縁側に干した座布団の日向くささは故郷の家を思い出させる。

(現代形容詞用法辞典)

以上の考察から見てやはり解明できない語が一杯である。語彙は時代と共に変化するものである。内省できない、また字引に頼るしかない外国人は実に扱いにくいものである。

3.1 日本語教育における「さ」の提出順

ここでは、接尾語「さ」について教授中と学習中にどんな問題点にぶつかるか、それをどう解決するかを焦点に考えてみたい。

今回の調査では、大学の日本語学科の読本の授業に使われている教科書を中心に分析した。対象とした教科書は以下の通りである。

段階	初 級	中 級	上 級
教科書	初級日本語（東京外大）	日本語読本第二冊	日本語読本第三冊
	日本語読本第一冊（東京大学文化研究所）	日本語Ⅱ（東京外大）	日本語Ⅲ（東京外大）
	新日本語の基礎Ⅰ	日本語中級Ⅱ（国際交流基金） 新日本語の基礎Ⅱ	

次の手順として、各教科書で接尾語「さ」が何課と何課に出てくるかを調べる。

その結果は次の通りである。

初級	日本語読本第一冊 24, 29, 35	初級日本語 11, 25	新日本語の基礎 I —	
中級	日本語読本第二冊 20, 22, 24, 25 26, 33, 34, 35	日本語中級 I 9, 12, 14	日本語 II 2, 8, 19, 20, 22	新日本語の基礎 II —
上級	日本語読本第三冊 日記の文例 (一), 諺についての報告, 原子と人間 南極の生活, 論説文の書き方, 読書論, 詩を書く, 一個の人間, 俳句の世界 (二), 日本の民話, 耳なし芳一, 和語・漢語・外来語		日本語 III 1, 3, 4, 5, 8, 12	

※『日本語読本第三冊』は課数を標示していないので、その標題を書く。

上表から、教科書が異なるのにもかかわらず、接尾語「さ」は初級の後半から初めて提出されるのがわかる。中級、上級へ進むにつれて使用頻度が増えていく傾向が見られる。

接尾語「さ」提出段階を一応知った上で、次に、各教科書の教授の理念を探りながら、「さ」の指導について筆者の考えを述べる。

3.2 日本語教育における「さ」の扱い

「さ」に対する扱いは初級と中級・上級との二段階にわけて検討したい。

(一) 初級段階

まず、初級教科書に「さ」がどんな文に現れるか、また編纂者がそれについてどのような解説を加えられているかについてみる。

(1) 日本語読本第一冊

第24課 形容詞 ◆真夏の暑さにたまらなくて避暑をする人もいます。

第29課 に ◆あまりの嬉しさに飛び上がりました。

第35課 ほど、ばかり、ぐらい ◆これぐらいの大きさですか。

解説^⑩：暑さ：(名)熱/ 嬉しさ：(名)喜悅/ 大きさ：(名)大、大きい：形容詞

(2)初級日本語

第11課 ◆高さはどのぐらいですか。

◆手紙の重さを計ります。

◆手紙のたてとよこのながさを計ります。

第25課 ◆わたしは雪国で生まれたから、そのきびしさをよく知っています。

解説： 11課 新しいことば： 高さ 重さ 長さ

25課 新しいことば： きびしさ

『日本語読本第一冊』において「さ」は24課で提出される。24課の内容は主に形容詞の語形変化を紹介するものである。すなわち、24課の学習項目は形容詞であるが、「形容詞の語幹+さ」という派生形式が同時に導入されるようになっている。24課より前の課では「～さ」という派生形式が現れないことも裏付けている。したがって、29課と35課の「嬉しさ」「大きさ」は既習のものとして扱われる。『初級日本語』では、「～さ」提出はすべて一つの単語としてのみ扱われている。

説明の方には『日本語読本第一冊』は中国人のために編纂されているので、中国語訳がついている。それに品詞の説明もある。更に、「大きさ」という説明の後ろに「大きい」という形容詞がついていることを見ると、「大きさ」が「大きい」から転換されたことを表明したいのだろう。『初級日本語』では文法・語法解説がない。ただ本文の最後に「新しいことば」の項目で本課のことばをまとめ

⑩ 『日本語読本第一冊』に本文の下に中国語で文法・語彙の説明がある。

ている。

次に初級段階の接尾語「さ」について、語彙面と意味面をどう指導したらいいかを考えてみたい。語彙面において挙げた日本語教育のための基本形容詞は200語ある。^⑪ 筆者の調べによると、「さ」の付かない形容詞は5語しかない。

いい いけない 違い^⑫ない とんでもない よろしい

このうちに「いい」と「よろしい」は同義で、ほかの3語はいずれも「～ない」の形をとるものである。言い換えれば、この5語を除いて、ほかの195語の形容詞の語幹に「さ」が付くことができる。しかし、日本語教育の基本形容詞はいずれも初級段階に現れる可能性が大きいと言っても、必ずしも「～さ」の形で現れるとは限らない。実は教科書に現れている単語は7語しかない。その7語の元の形容詞は全部単純形容詞で、「嬉しい」を除いてすべて属性形容詞に集中している。更に、「暑さ・高さ」の2語は日本語教育の上ですでに一単語として認められている。^⑬

一般的に言って形容詞は初級の前半ですでに提出される。^⑭ 言い換えれば、「暑さ」を習う前に、もう多くの形容詞を習得しているはずである。またよく注意してみると、初級段階で「～さ」を使う文の多くは目に見える具体的な物について述べているものばかりである。したがって「さ」に対する語彙の指導において初級学習者にとって、耳から覚え習慣づけることが大切である。学習者に心理的な負担を感じさせないように、既に習った形容詞（属性形容詞を中心）を「長い→長さ」のように、ペアを繰り返して聞かせることによって、「い」が落ちて

⑪ 『日本語教育のための基礎語彙調査』を参照。

⑫ 「違い^⑫ない」という語が【選】に登録されていないので、調査の範囲から取り除かれたが、【新】【集】の二辞書に登録されて、「さ」を記載しないから「違い^⑫ない」の語幹に接尾語「さ」がつかないと筆者は判断する。

⑬ 『日本語教育のための基礎語彙調査』により、「～さ」の形で基礎語彙の一つとなるのは「厚さ・暑さ・寒さ・高さ・強さ・速さ・広さ・深さ」である。

⑭ 『日本語読本第一冊』は第九課、『初級日本語は』は第2課、『新基礎日本語』は第八課に形容詞を紹介する。

代わりに「さ」が来るということをまず耳で判別させる。次に注意しなくてはならないのは品詞の転換である。すなわち形容詞の語幹に「さ」がついてからは、もう形容詞ではなくて名詞に変わったことを学習者に知らせなくてはならない。

言葉を上手に使用するためにはその意味を十分に理解しなくてはならない。外国語を習うに当たって、母国語の翻訳を借りて説明するのが一つの学習の方法である。次に日華辞典から実例を取って説明しよう。

高い/ 高	高さ/ 高度	◆背の高さを計る。/ 量身高
強い/ 強	強さ/ 強度	◆電流の強さを計る。/ 測電流強度
悲しい/ 悲哀	悲しさ/ 悲哀	◆悲しさに胸が痛くなる。/ 為悲哀而痛心
嬉しい/ 高興	嬉しさ/ 高興	

客観的な状態を表す形容詞に「さ」がついた場合、その中国語の訳は中国人にはよく分かる。それに対して、感情形容詞に「さ」がつくと、その訳はもとの形容詞と同じである。更に、上に挙げた例は全部辞書に見出し語として載せてあるので中国語の対訳がある。実は辞書に載っていない「～さ」の語はその大部分を占めている。

教科書の説明にはどう述べるだろうか。「暑さ」が「熱」、「嬉しさ」が「喜悦」、「大きさ」が「大」というような説明は中国人にとってはむしろ形容詞のように感じやすいので、使用しているうえで混乱が起こりやすいと思う。中国人にとって、漢語の学習において非漢字系学習者よりたやすくて親しみを感ずる。したがって、母語訳を与えるより、母語に相当する漢語を与える方がいいのではないか。例えば、「高さ→高度」「重さ→重量」「嬉しさ→喜悦」のようである。ごく限られた語以外の漢語は決して形容詞にはならない。更に、教える側の教師もこのチャンスを利用して、和語と漢語との差異を早めに学習者に知らせることができる。

(二) 中・上級段階

次に中級・上級について考えてみる。まず中級・上級教科書に現れている接尾

語「さ」を伴う単語を見よう。

中級：暑さ 厚さ ありがたさ 美しさ 大きさ 重さ 心細さ 濃さ 寂しさ
寒さ 高さ 強さ 長さ なさ 広さ 太さ

上級：明るさ あじけなさ 新しさ 暑さ いらただしさ 美しさ おおきさ
恐ろしさ 暗さ 心細さ 寒さ すがすがしさ すさまじさ 高さ 強さ
つらさ 速さ 古さ 醜さ 難しさ ゆかしさ 弱々しさ 若さ

初級と比べると、数が多くなり、複合形容詞・感情形容詞も現れている。意味の説明には全部の教科書に「～さ」語に対する解説がない。^⑮言い換えれば、中級・上級段階で接尾語に対する扱いがすべて教授者に任せられるということである。したがって、筆者の考えでは中級・上級の学習者に対して接尾語「さ」についてはやはり語彙面と意味面に分けてそれぞれ対処する方法を考えるべきである。

中級へ進むにつれて、学習する項目も複雑になる。語彙面において、「初級で与える語彙は学習の基礎語彙としてどの学習者にも共通のものであるが、中級段階ではそれぞれの目的に見合った分野の生活語彙や専門課程に入る予備段階としての学習語彙を選んで配合していく」^⑯とするなら、中級・上級教科書には学習者のニーズにより、その内容はいろいろな分野を含んでいるので、多様の単語が出てくるのも意外ではない。もっと多くの教科書を調べたら、いろいろな語彙が出てくるに違いない。したがって、中級・上級は語彙の学習において量的にも質的にも発展させる段階とも言える。初級と同じように、教科書に出ている単語を一つ覚えていては効率が上がらない。言葉を体系的に学習者に学習させることが大切である。

特に、「さ」は接尾語であるから、語をばらばらに与えず、どの品詞に、どんな意味の語につくかについて、ある規則がたてられるなら、学習者にきっと役立つ

⑮ 『日本語読本第二冊』に本文の下に説明もあるが、主に文型・語法の解説であって単語の説明は少ない。「～さ」語については全然説明しない。

⑯ 森田良行『日本語学と日本教育』p473, 474

つと思う。

2.2で述べたように、ほとんどの形容詞は接尾語「さ」をとることができ、とりにくいものは以下のような特徴を持つ。

- ①程度を表さない意味の語
- ②方言・俗語・文語
- ③連用・連体修飾がその主な職能の語
- ④一定の語結合の一部としてしか使われていない語
- ⑤「動詞の未然形＋助動詞ない」からできた語

その五つの特徴には(3)から(5)までの語がもっとも多い。これらの語は必ずしも中級・上級段階で現れるわけではないが、現れないとも限らない。しかし上の規則により語を一つのグループとして一括して頭に入れることができる。学習者にはどんな形容詞に「さ」がつくかが簡単に弁別できると思われる。

意味面において初級で現れる「～さ」語は少ないから、それに相当する漢語を与えていい。学習者もこれによりもっと多くの語彙が身につけられる。しかし中級・上級に入ると、扱う文が長くなり、学習者自身の日本語能力も増す。語彙であれ、文法であれ、初級段階に比べてずいぶん進んでいる。そして、前の調査により、中・上級の教科書に出ている「～さ」語は多様になり、感情形容詞も多く現れる。この段階でももちろん中国語に類似する漢語を与えて説明するのも一つの方法であるが、いくつかの難点がある。

- ①すべての「～さ」語は必ずしも一つの漢語で置き換えられるとは限らない。
- ②一つの漢語があらゆる場合に「～さ」語と対応できるとは限らない。

例えば、

(28) 東大寺の大仏は高さが約一六メートル、重さが五〇〇トンもあるそうです。

(日本語読本第二冊 26課)

のように、この場合の「高さ」は「高度」で置き換えるのがぴったりである。次の例はどうだろう。

- (29) 多くの人々は一年じゅうで最良の季節を選んで設けられたこの日に、文化
がもたらす無限の恩恵を思い、その価値の高さをかみしめているようにみ
える。 (日本語Ⅲ 5課)

この場合の「高さ」はどうも「高度」では置き換えられず、別の言葉での置き
換えが必要である。

- ③漢語で置き換えられても、「～さ」語（和語）と漢語との間に多少のずれが
ある。

例えば、和語と漢語との間に和語のほうが話し言葉で柔らかい、漢語の方が書
き言葉で堅いという文体と語感に差がある。そして、和語の方が日本人の気持ち
をぴったり表すと言われる。それを漢語に置き換えたら、かえっていかめしい感
じの言い方になりやすい。

- ④実際に使用しているときに、中国人学習者にとって、必ずしも「～さ」語を
使うわけではない。

漢語を多く与えると、実際に使用しているときに障害を来す。例えば「量身高」
とい文なら、「背の高さを計る」より「身長を計る」、「電流的強度」なら「電流の
強さ」より「電流の強度」のように、中国人なら漢語を使って表現することが多い
と思う。そうなると、日本語らしくない日本語になってしまう可能性が大きい。

中国人学習者にとって、漢語が自分の母国語に類似しているので、それを利用
して理解させるのが時間的にも速いという長所がある。が、日本語教育は聞く・
話す・読む・書くという言語の四つの技能を含む。学習が常に母国語で日本語を
理解してしまうことによりいつまでもその域に閉じ込め、単に理解するに止ま
る恐れがある。理解したものをいかに表現するかも日本語の能力の一つである。
したがって、この点の注意を怠ってはならない。

中級・上級段階における「～さ」の意味の指導はやはり日本語で説明するのが
もっともよい。それと関連する類義語を与えてもいいが、もし漢語の場合なら前
述の問題点を注意しなければならない。

4. 結び

本稿は辞書の形容詞を収集し、接尾語「さ」の記載状況を記録、分析してある規則を見いだすという帰納的方法をとった。しかし接尾語の認定の仕方は辞書の編纂者自身の判断に委ねられている場合が多いので、はっきりした基準はない。そして、辞書の登録状況と実際に小説から捜し出した例と比べてみると、辞書の記述に合致しない現象も見られる。したがって、当初目的とした「さ」の接続の規則を全般的に究明したとは言いがたい。更に、共時的な研究なので、現代語と古典語との間にどのような繋がりがあるのか全然触れていなので、これらは今後の課題としたい。

本稿は多くの課題を残し、不備な点も多くあると思われるが、これらの研究の積み重ねにより、これからもよりよい中国人学習者に対する日本語教育法を模索してゆきたい。

参考文献

- 遠藤織枝 (1985) 「接尾語『さ』の一考察」『国語学論説資料 22-4』
北原保雄等 (1988) 『日本文法事典』有精堂
金田一春彦等 (1989) 『新明解国語辞典 (第四版)』三省堂
国際交流基金 (1980) 『日本語中級 I』凡人社
国立国語研究所 (1989) 『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所
佐伯梅友等 (1980) 『新選国語辞典』小学館
鈴木一彦 林巨樹 (1973) 『品詞別日本文法講座四 形容詞・形容動詞』明治書院
————— (1984) 『研究資料日本文法③用言編(一)形容詞・形容動詞』

明治書院

東京外国語大学付属日本語学校教材開発研究協会代表者 鈴木忍（1979）

『日本語Ⅰ』『日本語Ⅱ』『日本語Ⅲ』 凡人社

西尾寅弥（1975）『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

日本海外技術研修協会編（1992）『新日本語の基礎』『新日本語の基礎Ⅱ』

大新書局

森岡健二等（1993）『集英社国語辞典』 集英社

———（1990）『日本語学と日本語教育』 凡人社

蔡茂豊（1988）『日本語読本』 東呉大学日本文化研究所

高崎みどり（1984）「『ない』について」『国語学論説資料 21-3』

塚原鉄雄 神尾暢子（1967）「複合形容詞の構成と表現」

『国語学論説資料 4-3』

鍾芳珍（1992）「日本語教育における形容詞について——特に接尾辞『さ』

『げ』『み』と関連して——」『東呉日本語教育 15』 東呉大

学日本文化研究所

松本清張（1973）『松本清張集』 筑摩書房

辰濃和男（1993）『辰濃和男の天声人語 [人物編]』 朝日新聞社

飛田良文 浅田秀子（1992）『現代形容詞用法辞典』 東京堂

三浦綾子（1972）『自我の構図』 興文社

———（1978）『細川ガラシャ夫人』 主婦の友社